地域の発展に尽くす
―宮本 逸三―

この写真は、水郡線の常陸鴻巣駅です。上菅谷駅から大子方面に向かう最初の駅で、駅舎は集会所を併設した「常陸鴻巣ふれあい駅舎」として、地域住民の交流の場となっています。

水郡線沿線の他の駅舎と異なり、駅舎内に集会所が併設され、「ふれあい駅舎」と命名されたのには理由があります。地域活性化のため、水郡線をこの地に通すことに尽力した一人の人物、宮本逸三の活躍です。「ふれあい駅舎」建設には、彼のどのような思いとドラマが秘められているのでしょうか。

代議士
戦前、国民の参政権を反映して当選した国会議員を指して使われたことから、主に衆議院議員を指す表現。

水郡線敷設　（常陸鴻巣駅：那珂市歴史民俗資料館）

明治四十四年（一九一一年）三月、宮本は那珂郡選出の代議士根本正らと協力して郡山～水戸間の鉄道敷設工事を国家事業として可決させました。海産物の内陸輸送の便を図ると同時に、鉄道の敷設で周辺地域の活性化を進めるのが目的の一大事業です。

「これで、地域の暮らしを少しでも豊かにすることができれば…。」

議員達との協力だけでなく、当時の県知事岡田宇之助への陳情など宮本の努力が実を結んだ瞬間だったのです。

しかし、事態はそううまくは運びませんでした。大正五年（一九一六年）、それまでの内閣から新しい内閣に変わると、突然、水郡線案は建設延期とされてしまうのです。主な理由は、建設用地と予算の確保の目途が立たなかったことといわれています。

「このまま鉄道の敷設が遅れてしまっては、いつまでも暮らしは良くならない。」

そう考えた宮本は、早期の鉄道開通のために水戸鉄道敷設に協力をしていくことになります。

まず、常陸鴻巣駅の敷地や周辺道路の敷地として自分の所有する土地を寄付提供しました。

「この地になんとしても鉄道を。」

その一心で行ったことでした。

駅舎建設の段階で、また別の問題が発生します。駅舎建設費が総額千二百円も不足していたのです。宮本は村議会に交渉し、村費で八百円を負担してもらうことが決まりました。しかし、まだ四百円の不足です。それならばと、宮本は残りの金額を自ら寄付したのです。

こうして、鴻巣駅舎は大正七年（一九一八年）六月に建築され同月瓜連駅も続き、十月には常陸大宮駅も完成して水戸鉄道の水戸～常陸大宮間が開通したのです。

地域の発展を夢見て、自らの私財をなげうってまで駅舎の建設に尽力した宮本逸三。

今では静かにたたずむ「ふれあい駅舎」が彼の熱い思いの結晶として残されています。

四百円

大正五年当時の四百円は、現在の約二百万円程度。

※諸説有り

「那珂市ゆかりの先人たち」より

宮本逸三

一八五九年（安政六年）茨城県金砂郷村（現在の常陸太田市）に生まれる。一八七六年（明治九年）十八歳の時、鴻巣村（現在の那珂市鴻巣）の宮本家の養子になる。一八八五年（明治十八年）二十七歳の若さで茨城県議会議員に当選し、県政の融和と発展に尽くす。その後一九一七年（大正六年）には衆議院議員となり、国会議員の立場から茨城の発展に努めた。